

## アレキン劇場で「涯なし」を観て

2013年5月28日 西村洋一（演出家）

『涯なし』は、二回上演された。一回目の昼の部は、フェスティバル参加者や関係者向け。二回目の夜の部は、一般の観客向けだった。わたしが客席で観たのは、二回目の夜の部だった。（昼の部は、照明・音響のオペレーター室にいて、現地の劇場スタッフのサポートをしており、わたしは別な緊張感を味わっていた…）

わたしは、この舞台を観て、なぜか「能のようだ」という印象を受けた。何もない舞台、仮面を使っていることなども、能を連想させたのかもしれないが、そればかりではないだろう。現代の能ではなく、原初の能に通ずるような何かを、直感的に感じたのだ。

例えば、人形とともに、舞台に座っている場面。大きな動きがあるわけではないが、存在の仕方が、内面とつながったようなあり方だったためか、周りの空間に溶け込んで一体となり、舞台上の空間自体が生きているような感覚があった。とても澄んだ、純度の高い空間。それが、観客席の方にも及んできたためか、少し動くだけでも、観ている者に影響を及ぼしていた。そこで舞台に生まれていたのは、静的な吸引力だった。観客の注意が自然と引き寄せられていったように感じた。

この舞台を観たロシア人のベテラン俳優が、的確な表現で感想を述べていた。彼がいうには、「最近の舞台は、観客に面白いもの、楽しいことを与えよう、与えようとして、その結果、舞台の方から客席に向かって、押し付けようとしている。だが、この舞台では、そのようなことはなく、逆に観客の方が、舞台では一体何が起きているのか、と注意を向けていた」

また、この上演にも関わった、アレキン劇場のあるスタッフは、次のように語っていた。「今回のフェスティバルでインドの人形劇も見たが、その作品からは、インドの伝統的な技術を継承している、という印象を受けた。だが、『涯なし』には、太古から受け継がれている日本の精神性が感じられた」

現代の能も、観ている者に、何かを「与えよう」としていることが多いように思う。今回の舞台には、能が本来求めているものがあつたのではないだろうか。観客にもそれが伝わったのであろう。カーテンコールの拍手は、本物だった。